タイトル未定

SIM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイトル未定

【Ｎコード】
Ｎ２１３５Ｗ

【作者名】
ＳＩＭ

【あらすじ】
気がついたら生まれ変わっていた！？
前世の記憶が残っていた主人公では知らない世界でいったい何を起こしてくれるのか！？

目覚めたらそこはお腹の中でした

おめでとうございます。私こと御影　春人はどうやら本日生まれたようです。

「生まれたのかメリッサ、よく頑張ったな。おぉ男の子じゃないか、ではこの子の名前はノエルにしよう！今日からお前はローランド・ノエルだ！」

おめでとうございます。私こと御影　春人はどうやらローランド・ノエルになりました。

どうしてこうなったかというと、前世の記憶がどうやら俺には残っていたんだよね。ちなみに最後の記憶は２２歳の俺が入社したての会社帰りに先輩に飲みに誘われて、よっぱらった帰りに車道に飛び出した猫を助ける為にトラックの前に飛び出してそこで途切れている。あのドラ猫は無事だったのかどうかが心残りだ。

最初に意識がはっきりしたのは母親のお腹の中で、そのときから外の状況は聞いていたのでなんとなくは理解している。ここは前にいた日本ではなく、イサクと呼ばれる国だそうだ。ちなみにこの世界はジェネシスといい、ここ共和国イサク、連合国ヤコブ、帝国アブラハムと呼ばれる３つの国によって成り立っているらしい。元の世界じゃ考えられないぐらい国が少ないよね。

今までの世界と違うところが、生活水準が元のいた世界に比べてあまりにも低いところだろうか。道には馬車が走り、連絡手段といえば手紙、ここには電気だって無い。イメージとしては中世ヨーロッパみたいなもんかな？その代わりといっちゃなんだが、ここには

ファンタジーの世界でしか聞いたことの無い魔術ってもんが存在するみたいだ。聞いたときは一刻も早く魔術を使ってみたくなったもんだ。

俺を生んでくれた母親の名はローランド・メリッサ、父親はローランド・ラムザという。貴族階級の存在するこの国では、この家は下級貴族になるようで、一般市民に比べれば少し裕福な程度の家だそうだ。両親共に夫婦仲は最高で、毎晩のように愛のささやきを聞いていたら、さすがの俺も気が滅入りそうになった。まぁこの夫婦の元でなら幸せに生きていけるだろう。

ちなみに生前のスペックとしては高校からずっと男子校だったせいか、実は彼女の1人もいたためしがない。つまりピュアボーイとして生涯を終えてしまった。貧しい家だったため、奨学金で大学に通うために勉強ばかりしていて、天才ほどではなかったが賢かったほうではあったと思う。その後ちょっと名の知れた企業に合格し、さあこれから！というところで事故にあってしまった。思い出してきたら未練がハンパじゃない。

とにかく俺は母親のお腹の中で長い時間考えた末、せっかく生まれ変われるんだからこの世界では楽しくやろうぜと、いうことで本当にこれからの人生が楽しみなのである。・・・父上、抱っこしていただけるのはいいのですがヒゲが痛いです。

ふと父上と母上の顔が俺の視界に視界に入ってきた。これが俺の両親の顔か、2人は本当に美形だと思う。これなら俺の顔も安心だろう。どうせだったら美形に生まれたかったからな、神様がいるなら礼を言いたいぐらいだ。

「ふふ、この子楽しそうに笑っている。ねぇラムザ、こんな素敵な

子にめぐり合えたのは貴方のおかげだわ。ほんとにありがとう。」

「何を言っているんだメリッサ、君が頑張ってくれたおかげじゃないか。この子も君に似てホントに可愛いよ。」

あの、父上？母上？俺の前でいちゃつくのはいいんですけどまだお医者さんもいらっしゃいますからね？・・・はぁ、ホントにこのバカップルはどうしようもないな。

「あら？おなかがすいてきたのかしらね？じゃあミルクをあげないといけないわね。」

っ忘れていた！！！意識があるということはこれも通らなければいけない道だということか！！！ちょ、ちょっと母上まだ心の準備が・・・ってあああああぁぁ！！！

「ちゃんと飲むのよ～？おいしいでちゅか～？」

か、体がいうことをきいてくれない。正直言ってめちゃくちゃ恥ずかしい。精神年齢としては２２歳の俺がこの歳になってこの扱いはひどすぎる。これがこの先続くのか・・・俺、耐えれるかな？

はじめてお友達が出来ました

あれから、３歳でこちらの世界の文字も理解できるようにはなったが、騒がれたくなかった俺はさまざまな分野の本で勉強をしながら歳相応の子供のふりをしつつ今年で７歳になった。それでも元の世界での知識もあったせいか、隠し切れずに地元では神童と呼ばれていたが。

貴族の子供は皆７歳になると学園に通い、将来国のために働けるように１６歳までは必ず勉強をして学園ですごす。１０年間のうちの５年間が初等科、残り５年間が中等科となっている。１７歳からは希望すればあと３年間高等科に通うこともできる。高等科に通う生徒は、国のトップや上級貴族などの特に重要な役職になるものが通うところらしい。

今日は入学式があるため、母上に手を引かれながら学園に大きな荷物を抱えて到着した。学園は全寮制になっており、これから最低１０年間はここで寝食をすることになっている。どうやら自立精神がなんとかかんとか言っていたが、大学時代に１人暮らしをしていた俺には問題はないだろう。

「母上、学園とはとても大きいところなんですね。」

「懐かしいわね、ラムザに出会ったのもここだったわ。ノエルも素敵な人を見つけたらすぐに母に伝えるんですよ？母がついていけるのはここまでです、いってらっしゃい私達のかわいいノエル。」

母上にめちゃくちゃ恥ずかしいことを言われて学園の大きな庭の

ところで背中を押される。どうやら母上は俺の入寮する部屋に荷物を持っていってくれるみたいで、ここからは1人で入学式があるところにいかなければならないみたいだ。

入学式は講堂でおこなわれるのがしきたりらしく、その場所まで学園の先輩達が誘導してくれているのがちらほらと見える。やはり子供は親と長い間離れるのが寂しいのか泣いている子供がいて、なだめている先輩の姿も見えた。少し辺りを見回していると、赤髪の少年と目が合い近づいてきた。

「なぁお前、もしかしてローランド家の・・・たしかノエルだったか？」

「あぁ、たしかにローランド・ノエルだけど、会ったことあったっけ？」

俺はここに来るまであまり同い年の人間とあった覚えはほとんど無かった。自分の知らない魔術の研究のためにほとんどの時間を王立図書館で費やし、武官である父親に毎日のように特訓に付き合わされていたので人との交流が極端に少なかったからだ。

「やっぱりお前が神童か、青髪で美形って聞いてたからまさかなーって思ってたんだけどあってたみたいだな。あ、俺の名はクラーク・アランブレッド、アランでいいぜ。これからよろしくな。」

「クラーク・・・6家の上級貴族だよね？うん、よろしく。なんで俺なんかに声をかけたんだい？」

6家というのは上級貴族の中でも特に位の高い貴族で、国王の次に発言権をもっている。少しは俺も有名みたいだけど、学園に入っ

てすぐに6家に目を付けられるなんてツイてないな。両親が迷惑がかかるようなことは絶対にしたくないからトラブルだけは避けたかったのに、6家と知り合いになるなんてトラブルの原因に他ならないじゃないか。

「ぶっちゃけて言うと学園に入学したらお前の事を監視しろって親父に言われてたんだよな。将来国に仇名すものならすぐに報告するように、ともな。でもお前はいい奴そうだし、どうせなら友達になっておこうかなって思ったんだよ。」

「ぶっちゃけすぎじゃない？それにまだ悪い奴かどうかわからないじゃないか。まぁ仇名すつもりもないからいいけどね。」

こいつはバカなんじゃないだろうか？でもここまでぶっちゃけてくる限り、よほど曲がったことが嫌いなんだろう。正義感溢れたいい目をしている。こんな奴は前世でもこっちにきてからも出会ったことは無かった。こいつにはずっとこのままでいて欲しいな。ていうか俺って知らないうちに6家に危険視されるほど有名になってたんだな。

「とりあえずよろしく、俺の事もノエルでいいよ。そろそろ講堂に行こうか、遅れると誘導してくれている先輩達に迷惑がかかっちゃうからね。」

第一印象は最悪でした

どうしてこうああいう式の時って無駄な話が多いんだろう。ご立派なヒゲを蓄えた学園長のありがたーいお話を聞いた後、俺たちは教室に戻っていた。クラーク家が監視させる為に手を回していたのだろう。案の定俺たちは一緒のクラスだった。

「俺ってああいう長ったらしいのダメなんだよね。親父によくお偉いさんの会談とかに付き合わされたりするけど絶対に慣れねえよ。ノエルはよく涼しい顔してられんな。」

「一応俺も貴族だよ？それぐらいは小さい時から両親に教えられてるからね。」

隣でノビているアランが唸っているが無視して俺は先生をきちんと待つことにした。貴族の世界では当たり前のように礼儀や作法が常に求められるから、いくら7歳でもこれぐらいは出来て当たり前のはずなんだけどな。気が抜けているのはクラスの半分ぐらいってところか、親の顔が見てみたいよ。

「おらー、てめぇら全員席についてやがるな？とりあえず入学おめでとう、ここのクラスの担当になったペルソナ・ウィルスだ。これから１０年間はずっとこのクラスでやっていくからよろしくな。じゃあ順番に挨拶していけよー。」

元いた世界とは違い、こちらの世界ではクラス変えというものが無い。だから学園に入ってしまえばずっと同じクラスのまま１０年

間過ごすことになる。いじめっ子がいるクラスになんてなってしまったら最悪だね。

「よーし次、挨拶しろ。」

「はいっ、ローランド・ノエルです。この学園ではさまざまな優秀な教師の方々や先輩方がいらっしゃると聞いております。私はそのすばらしき方々に是非ご教授していただきながら自己研鑽していくつもりですので皆さんも一緒に頑張りましょうね？男女関係無く仲良くしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。」

教室内から「あれが神童・・・」とか「あいつ入学テストの時1位だったんだろ」とかいう言葉が聞こえてくる。もうちょっと7歳らしく振舞っとけばよかったかな？でもこれで逆に近づいてくる奴は減るだろう。俺はどっちかっていうと魔術の勉強をしたい。すると1人の金髪の少年が意を決したように立ち上がった。

「ふんっ、偉そうにしやがって神童だかなんだか知らないが、貴様はこのヴァーミリオン・グレイが許さん。貴様に決闘を申し込んでやる。その高慢な性格を叩きなおしてやる。」

ちょっとまって、俺は恨みを買うようなことをした覚えはまったく無い。たしかに人を寄せ付けないような言い方をしたかもしれないけど、そこまで言われる覚えは無い。

「何？君に決闘を申し込まれるほどの事をした覚えは無いんだけど？」

「うるさい！いいから着いて来い。先生、決闘ならば問題は無いですよね？グラウンドを借りさせていただきますよ？」

「決闘ならば仕方ないが・・・仕方ない、立会いしてやろう。」

なし崩しに決闘にもちこまれてしまった。この国では決闘というシステムは日常茶飯事で、気に入らなければ力で押さえつけるということは貴族間ではよくおこなわれていることだった。今回決闘を申し込んできたのは上級貴族のヴァーミリオン家だ。位が低い貴族に対しておこなわれる決闘に関しては、たとえこちらが負けたとしても家へのリスクは無い。あるとしたらデッドオアアライブといったところだろう。決闘が終わればお互いそこで気持ちに区切りをつけるというのがルールなので、とりあえずは俺は従うことにしますか。でもなんでだろう？

「あいつはな、今年の入学試験3位だったそうだ。1位がお前で2位が俺だ、家で下級貴族に負けたことについてこっぴどく怒られたんだろうよ。俺も親父にちょっと言われたけどな、それだけ上級貴族にはメンツってもんがあるんだよ。」

ふむ、ようは逆恨みってやつだね。まったく、こっちは勉強した結果だっていうのにこの仕打ちはなんなんだ。負ける気はないしこの機会だ、徹底的にやってあげようじゃないか。っていうかクラークが2位だったのか、アホそうに見えて意外とやるみたいだね。

売られた喧嘩は3倍にして返しました

この世界の魔術の一般常識は火・水・風・土・光・闇が属性として成り立っている。他にも無というものがあり、無属性は体外に放出出来ない属性として数えられている。全ての属性は誰でも使えるし、誰でも使えない。その意味はイメージ力の差であり、それぞれのパーソナルリアリティの差である。ようは当たり前と思ってしまうとそれまでの魔術しか使えないということである。

というのが俺が出した魔術に対しての見解である。この世界での一般常識では、属性とは家系的なもので使える属性が決まると思っているみたいだ。・・・っというのは終わりにして、今俺は誰にも見つからずにひそかに屋敷の庭で毎日のように練習をしてきた魔術がやっと使えることに相当テンションが上がっていた。

なんといっても、こっちの世界では比較対象が無かったのと、幼い子供が魔術講師も付けていない状態で魔術を公の場で使えば余計目立ってしまうからだった。俺の両親はあまり魔術が得意ではなかったので、子供に対しても魔術を教えても才能は伸びないだろうと思っていたからだろう。父上、母上、俺は実は全属性使えます。

父上はかなり剣の腕がいい軍人であったためか、剣の訓練をかなりさせえられた為に大人でも歯が立たないだろうといえるほどに剣の腕にも自身がある。とりあえず負ける気はしない。

「ローランド！貴様はここで俺に倒されるのだ、少し頭がいいからって調子に乗りやがって、その鼻ここでへし折ってやる。」

「仕方ないな、やるからには全力でやるよ。いいんだね？」

周りの生徒があざ笑っている。確かに他の生徒じゃヴァーミリオンには勝てないだろう。上級貴族は幼い頃から訓練を受けているものが普通だ。けど俺はその現実を覆せるほどの下積みをしてきたつもりだ、それも上級貴族に負けないほどの。

「それではヴァーミリオン家、グレイとローランド家、ノエルの決闘をここでおこなう。両者、遺恨の残らないように悔いなく決着をつけるように！」

ウィルス先生の一言によりヴァーミリオンが剣を構えてこっちに向かってくる。なるほど、魔法は使ってこないんだね。下級貴族だと思ってこっちの土俵で戦ってくれるみたいだ。案外こいつも悪い奴じゃないのかもね。

「はぁっ、はっ、はっ、はあああぁ！！！」

ヴァーミリオンの剣がさまざまな角度から向かってくる。父上と毎日のように訓練をしているせいかまるで止まっているかのように剣筋が見える。ここでの上級貴族のレベルを確かめる為、俺はあえて全ての攻撃を受けきってみせた。

「はっ、くっ・・・貴様、受けているだけか！」

「今後の参考の為にここの実力を知りたくてね。せっかくだし魔術、使えるんでしょ？使ってきなよ、俺も使えるから。」

あえて真実を告げ、魔術を使わせるように促す。周りの生徒達はさっきまでのバカにした笑いではなく、まるで夢でもみているよう

な顔をしている。正直ちょっとレベルの低さにがっかりかな？

「舐めるな！言ったことを後悔するんだな！」

『Ｃ'ｅｓｔ　ｆｅｕ　ｑｕｅ　ｌｅ　ｇｒｉｓ　ｅｓｔ　ａｃｃｏｍｐａｇｎ？』

＜グレイが従えるのは火＞

『Ｉｌ　ｄｅｖｒａｉｔ　？ｔｒｅ　ｃｕｉｔ　ａｕ　ｆｏｕｒ　ｐｏｕｒ　ｌｅｓ　ｆｌａｍｍｅｓ　ｄ'ｅｎｆｅｒ　ｓｕｒ　ｌｅ　ｃｉｅｌ』

＜天上の業火に焼かれるがいい＞

『Ｆｌａｍｍｅ　ｄｕ　ｔａｂｏｕ』

＜禁忌の炎＞

使ってきたのは上級の魔術の禁忌の炎だった。さすが上級貴族だね、詠唱は遅いけど上級を使ってくるなんてね。すぐに俺は対抗呪文を考え、今まで積み上げてきた魔法の中から使える魔法を探し出す。

『Ｌ'？ｔａｎｇ　ｄｅｓ　ｔｅｍｐｓ　ａｎｃｉｅｎｓ』

＜太古の池＞

俺は少し遅れてから略式詠唱で上級の太古の池を発動する。この魔術は上級の中でも最上級に近いほどに扱いづらく、範囲の指定が難しい魔術だけど細かいコントロールは3歳からやっているせいかこの程度のことは造作もないんだよ。

太古の池の略式発動で水浸しになって気絶しているヴァーミリオンを確認すると、自分の周りを見渡した。すると全員が唖然とした顔をしていて、言葉も出ないみたいだった。・・・ちょっとやりす

ぎたかな？

ちゃんと考えて言いました

ヴァーミリオンが保健室に連れて行かれるのを見送った後、俺はペルソナ先生に連れて行かれ学園長室のソファーに座らされていた。決闘で勝っただけなのになんでだろうね？

ちなみに魔術にはランクがあって下から下級、中級、上級、最上級、神級とある。詠唱も全詠唱、略式詠唱、無詠唱とあって、一般的には戦闘に対する効率からか無詠唱が出来る人間が優秀とされている。

「学園長、この生徒です。ヴァーミリオンと決闘し、上級魔術を略式詠唱で発動させました。」

「ふむ、ローランド君だったね？儂はステイ・サルベイトじゃ。君は魔術はどの程度のレベルまで使えるのじゃ？」

「魔術は全属性が最上級まで使えます。無詠唱は中級までになりますが、上級魔法なら略式詠唱で放てます。さすがに最上級は全詠唱でないと使えませんが・・・」

ちなみにヴァーミリオンは父親が軍のトップを勤めているらしく、今期入ってきた学年の中では天才と噂されていた子だったらしい。楽勝で勝っちゃったらまずかったか。でも喧嘩を売ってきたのは向こうのはず、俺は悪くない！

「それは脅威じゃな・・・おそらく君に勝てる生徒は初等科や中等科にはおらんじゃろう。高等科でもごく一部しか勝てんじゃろうな。

しかも知能では神童とまで呼ばれている才のある君じゃ、もっと高いレベルにいってみる気はないかの？」

なにそれ、気になる。今まで色々と知識を溜め込んでみたけど、知識欲っていうんだろうか？前世の記憶の影響のせいか止まらなくなっている。・・・というか何故か早く覚えなければいけないという感覚に捉われていた。

「是非お話を御聞きしたいです。」

「その前に君に聞いておかなければならないことがある。君はその力、その知能を使って何をする？」

唐突に聞かれた内容は俺の沸きあがってくる知識欲を止めた。確かに俺は今まで必死に勉強や訓練を重ねてきたけど、理由・・・が曖昧になっているような気がする。だけど、考え付く限りで今答えれる全てを答えようと思う。

「俺は家族や自分の周りにいる人たちを守りたいんです。全てとはいいません、自分の手の届く範囲の人たちを守りたい・・・あと、何が原因かわかりませんが歳を重ねるごとに胸騒ぎがするんです。」

「・・・わかった。ではひとまず本日は遅い、一旦寮に帰りなさい。」

俺は学園長に一礼し、その部屋を出ることになった。

「学園長、よかったのですか？今の彼は充分な守る力は手に入れて

いると思いますが。」

「いいのじゃ、彼はこの先何かがあるということを直感的に悟っているのじゃろう。たしかにこの国は今のところは平和じゃ、だが帝国・・・アブラハムが不穏な動きをしているのは事実。この先戦争は避けられんじゃろう。」

「ですがまだ彼は7歳ですよ!?これ以上彼が力を増せば戦争が起これば徴兵されるのは確実、そんなことが許されていいんですか!?」

「もちろん戦争に利用されることがないようにこれから儂が手を打つのじゃ。」

「まさか!?彼を・・・あの方に任せる気ですか?そ・・・それはあの子が廃人になってしまうのでは・・・」

「彼ならおそらく大丈夫じゃ、精神的にも問題はなさそうじゃしのお。」

お師匠様が決まりました

翌日に朝のＨＲ終了後に学園長室に呼び出された俺は、ドアを開けた瞬間に吹っ飛ばされた。咄嗟に防御魔法を無詠唱で2重に展開したため、怪我はなかったが背中に大きな衝撃を受けた。

「ボウヤ、強力な打撃を受けた時は背中にも防御魔法を1枚張れるようにしな。あと一点集中の攻撃ならその防御魔法は砕けてたぞ、3枚張れ。」

いきなりの挨拶に、担任のペルソナ先生は顔が引きつっていた。学園長においてはこっちを見ながら冷や汗を流している。というかこの女の人、綺麗な顔して強烈なこと言ってくれる。あの一瞬の間に合計４枚展開しろって・・・今の倍じゃないか。

目の前に立つこの人は、長髪で綺麗な

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2135w/

タイトル未定

2011年9月3日16時59分発行